

高低アクセント指導の導入に向けたワークショップ ー初中等教育機関で教えるインド人日本語教師を対象としてー

徳間 望・高柳 智美

要 旨

本研究では、インドでの高低アクセント指導の導入に向けて、初中等教育機関のインド人日本語教師（以下、IN 教師）を対象とした高低アクセント指導のワークショップ（以下、WS）を実施した。記述式アンケートを用いて、IN 教師 13 人は、1) WS で具体的にどのような情報を有用だと受け止めたか、2) WS を通してどのような高低アクセント指導のイメージを得ていたかについて調べた結果、以下の 5 点が明らかになった。a) IN 教師は、教えるための良いヒントが得られたと感じていた。b) インド式音階の利用等が有用だと感じており、教える時に使える具体的な情報を得ていた。c) 「生徒が高低アクセントを聞き取るコツ」として、たくさん聞く練習をしたり、リピート練習をすることが必要だと考えていた。d) 「生徒に適した高低アクセント認識方法」として、全ての IN 教師が視覚を含んだ認識方法を支持していた。e) 「生徒に適した高低アクセント指導方法」として、視覚と組み合わせて聞く方法を挙げる IN 教師もいた。IN 教師は、WS への参加を通して、高低アクセントに対する基礎知識を得たり、具体的な指導のイメージを持てるようになっていた。

【キーワード】インド、高低アクセント、初中等教育機関、インド人日本語教師、インド式音階

1. 問題の所在

インドの日本語学習者が日頃の学習成果を披露できる機会の一つに、毎年行われるスピーチコンテストがある。地方大会を勝ち抜いた出場者たちが全国大会で審査員から指摘されるのは、ここ数年、決まって発音の悪さである。審査員には、日本大使館員や日本人学校校長など、日本語教師ではない一般の日本人が選ばれる。このことは、インドの日本語学習者の発音が全般的に一般の日本人にとって耳につく、あるいは分かりにくい可能性を示している。

発話の分かりやすさを判断する要因として、一般の日本人は「内容」と「音声」を重視していることが指摘されている（野原, 2008）。野原（2008）はストーリーテリングの発話を対象としており、スピーチの発話と単純には比較できないが、スピーチの場合、参加者は事前に内容を十分吟味した上で練習を繰り返しているため、内容は良いはずである。このことから、音声の問題が分かりにくさの一因として考えられ、インドでは日本語音声指導が重要であると言えよう。では、インドで日本語音声指導はどのように行われているのだろうか。

2006 年以降、デリーの私立初中等教育機関（以下、初中等教育機関）では日本語教育を行う学校が増えている¹。しかし、インドには日本語教師を養成する教育機関がない（国際交流基金, 2014）。この

ため、自分が学習者として習った経験がないことは、教えられないという問題が起きている。磯村（2001）によれば、海外で日本語を教えるノンネイティブ教師を対象とした日本語アクセントに関するアンケート調査で、学生にアクセントを教えない理由として、「自分が知らないから」という答えが多かったという。インド人日本語教師（以下、IN 教師）の場合も、学習者として単音指導を受けており指導を行っているが、アクセント指導は受けた経験がないため、指導につながらない。また、インドでは、日本人日本語教師（以下、JP 教師）が初中等教育機関で教えていることは稀である²。このため、発音指導も多くの場合 IN 教師が一人で担当せざるを得ない。

以上のことから、まずは、日本語の高低アクセント（以下、高低アクセント）について体系的な知識を持っていない IN 教師たちが、学習者として様々な活動を体験する場が必要であろう。また、高低アクセントが授業で導入されるようになるためには、IN 教師たちが実際の教育現場で利用できる情報を得たり、具体的な指導法をイメージしたりできるようになることも重要である。そこで、本研究では、初中等教育機関の IN 教師を対象とした「日本語高低アクセント指導のワークショップ」（以下、ワークショップ）を開いた。

2. 研究目的と研究課題

本研究では、インドにおける高低アクセント指導の導入に向けて、IN 教師がワークショップで何を学んだかについて探ることを研究目的とし、以下の2つの研究課題を設定した。

- 1) IN 教師は、ワークショップで具体的にどのような情報を有用だと受け止めたか。
- 2) IN 教師は、ワークショップを通してどのような高低アクセント指導のイメージを得ていたか。

3. ワークショップのデザインの検討

ワークショップ開催に先立って、同僚の IN 教師と高低アクセントの勉強会を開いた。その結果、3人の IN 教師は教歴、あるいは日本留学が5年から7年と長いにもかかわらず、高低アクセントについて教わった経験がなく、高低アクセントについての基礎知識を持っていないことがわかった。IN 教師たちは、言語それぞれに違ったアクセント体系があることを知らず、ドレミを使った説明も理解しがたいようであった。IN 教師たちに、音の高低をどう把握すれば良いかについて意見を求めたところ、「インド式音階（サレガマ）を使うのはどうか」という意見が出た。サレガマとは日本語でいう「ドレミ」であり、音楽の授業を受けていなくても、インドでは誰もが知っている³。

以上から、初中等教育機関の IN 教師を対象としたワークショップは、日印の音楽的知識の違いを考慮するとともに、高低アクセントに対する知識が全くないことを想定し準備した。まず、音の高低の認識に、インド式音階を利用した上で、国際交流基金（2009）、戸田（2004）等を参考に、基本的な知識として1) アクセント核、2) 1拍目と2拍目の声の高さの違い、3) 平板型や頭高型など、アクセントの種類を紹介を行うこととした。また、アクセントの種類を図にして示す、手を上下に動かして高さを示す等の視覚的な認識方法、グループで話し合っただけの良い聞き取り方を検討する等の方法が提示できるよう準備した。

4. 実践の概要

4.1 参加者とコーディネーター

参加者はデリーの初中等教育機関で教える IN 教師14人と、日本語教育機関で教える JP 教師6人の合計20人である。JP 教師はできるだけまとめて

座り、観察者として参加してもらった。JP 教師は今回、IN 教師の視点から出される意見を知ることを通じて学べるよう意図したためである。JP 教師には事前に説明を行い、了承を得た。

IN 教師の日本語レベルは、JLPT（日本語能力試験）の N1（1人）⁴、N2（2人）、N3（7人）、N4（1人）、N5（2人）、JLPT 受験経験なし（2人）で、日本語教師歴は、6~8年（3人）、4~5年（5人）、2~3年（4人）、1年未満（2人）である⁵。参加者は3~4人ずつの6グループに分かれて座った。IN 教師の日本語レベルには差があるので、ワークショップは英語を媒介語として進めた。高低アクセント練習は日本語で行った。

コーディネーターは、IN 教師と JP 教師とで担当した。IN 教師の日本語レベルは JLPT の N1 で、日本語教育歴は7年である。

4.2 ワークショップの概要

4.2.1 「開始」と「導入」

ワークショップは2013年3月に、およそ2時間で行った。ワークショップ当日の流れは表1のとおりである。

まず、ワークショップの目的共有を行った。このワークショップでは、高低アクセントについて学ぶこと、そして、教師間の話し合いを通じて、インド人生徒に適した高低アクセント指導法の検討を行うことを確認した。次に、日本語がどのようなアクセント体系かについて全体で話し合った。14人中3人の IN 教師は、日本語が高低アクセントであることを知っていた⁶。高低アクセント指導経験は、IN 教師全員がなしと答えた。そこで、まず高低アクセントとは何かについて、IN 教師とコーディネーターの理解を一致させるため、キーボードでサレガマを弾いた。

続いて、拍の紹介を行った。パワーポイント（以下、PPT）で撥音、促音、長音などの混ざっている名詞の単語を見せ、どのように数えるか話し合った。拍の数え方がわかったところで、高低アクセント4パターンを PPT で表示した（図1）。

表 1. ワークショップ当日の流れ

	流れ	内容
1	開始 (10分)	・開始のあいさつ ・ワークショップの目的共有
2	導入 (30分)	・高低アクセントの理解共有 ・拍の紹介 ・グループで拍のカウント方法について話し合い ・高低アクセント4パターンの提示
3	聞き取り練習 (50分)	・高低アクセント聞き取りのヒント提示 ・単語とパターンが書かれたスライドを見ながら発音練習 ・発音を聞いた後、どのパターンかグループで話し合い ・質疑応答
4	まとめ (30分)	・ワークショップ内容についてグループで話し合い ・話し合いの結果を全体で共有 ・アンケート記入

[合計 120 分]

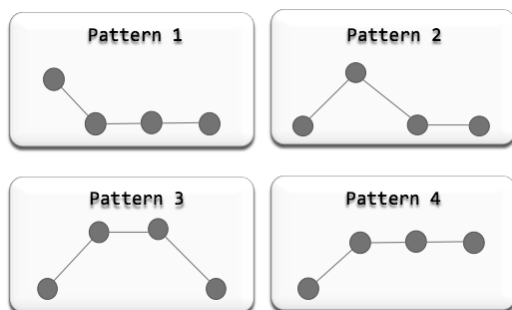


図 1. 高低アクセント4パターン

4.2.2 「聞き取り練習」と「まとめ」

高低アクセントを聞き取るヒントとして、「拍を数えること」「1 拍目と 2 拍目の高さはいつも違うこと」「音の下がるところに着目すること」の 3 つを示した。これを念頭に、単語の下にパターンが示された図 2 のような PPT スライドを見て、正しく発音する練習をした。この際、スライドを見ながらサレガマで歌う、手を上下に動かして高さを示すといった方法も紹介した。

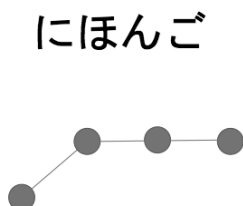


図 2. PPT スライドの例

次に、10 個の単語が書いてあるハンドアウトを配った。語彙は、語中のアクセント核の有無を聞き分ける練習ができるよう、平板型から 5 つ、起伏型から 5 つ選んだ。未知語を避けるため、普段 IN 教師が主教材として使用している『UME』⁷から、「まだ、しゅくだい、みなさん、かばん、うめ、えんぴつ、じしょ、べんとう、けしごむ、くつした」の 10 個とした。JP 教師がそれぞれの単語を発音した後、どのパターンかグループで話し合った。話し合いに十分時間を取った後、答え合わせ、質疑応答の時間を設けた。

まとめとして、ワークショップ内容についてグループで意見交換をした。話し合いの結果は各グループの代表者が発表し、全体で共有した。

5. 実践の評価方法

5.1 データ

データはワークショップ後に行った記述式アンケートである（稿末資料 1）。13 人の IN 教師⁸から英語による回答を得た。録画・録音記録は補助データとして用いた。

5.2 分析方法

回答の日本語訳及び分類は 2 名の JP 教師が担当した。アンケートの自由記述回答をデータとし、以下の手順で内容ごとに分類を行った。

1) 自由記述回答の 1 つのアイデアにつき 1 枚のカードを書く。1 つの自由記述回答に 2 つ以上のアイデアが含まれている場合には、分割し、それぞれを 1 枚のカードに書く。

- 2) カードの中で似通ったものをいくつかのグループにまとめ、それぞれに見出しをつける。
- 3) 2 人の分析者が各自の分析結果を持ち寄り、比較しながら最終的な見出しを決定する。

6. 実践の評価と考察

6.1 研究課題 1

研究課題 1 では、IN 教師は、ワークショップで具体的にどのような情報を有用だと受け止めたかを調べた。アンケート項目は、稿末資料 1 の問 1~4 である。表 2 のように、全体評価では、ほとんどの IN 教師が高低アクセントの聞き取りが楽になり、教えるための良いヒントが得られたと感じていた。

表 2. ワークショップの全体評価

	質問項目	Yes/No
問 1	ワークショップは、教える時役に立つ内容でしたか	13/0 人
問 2	ワークショップの後で、高低アクセントの聞き取りが楽になりましたか	12/1 人
問 3	インド人生徒たちに高低アクセントを教えるための良いヒントが得られましたか	13/0 人

続いて、問 4 で何が具体的に役に立つ情報だったのか尋ねたところ、表 3 のように、a から g までの 7 項目にまとめられた。自由記述例と合わせて以下に示す (括弧内は IN 教師番号)。

表 3. 一番役に立った情報

	記述内容	人数
a	インド式音階 (サレガマ) を使って高低アクセントを教えること	8 人
b	拍を数えること	3 人
c	アクセントパターンを知ったこと	3 人
d	高低アクセントが紹介されたこと	1 人
e	アクセントの教え方と練習の仕方	1 人
f	アクセント核を知ったこと	1 人
g	グループでディスカッションして異なる意見が聞けたこと	1 人

(複数回答あり)

a.自由記述例

- このワークショップに参加して初めて、Sa re ga ma で高低アクセントが理解できるということに気付いた (IN4)。
- 「高低アクセントをどのようにして音楽のように教えるか」がとても面白かった (IN3)。

b.自由記述例

- 手を打って拍を数えること (IN6)。

c.自由記述例

- 4 つのパターンで、高低アクセントをどうやって理解するかを学んだ (IN11)。

「a. インド式音階 (サレガマ) を使って高低アクセントを教えること」が役に立ったと考えた教師が 13 人中 8 人と最も多かった。また、「b. 拍を数えること」(3 人)、「c. アクセントパターンを知ったこと」(3 人)、「f. アクセント核を知ったこと」(1 人) など、高低アクセントについての基礎知識を得たことが役立ったと答えた IN 教師も少なくなかった。

インドの人たちは、一般に公的な音楽教育を受けていない。しかし、多くの人に馴染みのあるサレガマの使用が、高低アクセントの概念理解に有効であることが示唆された。また、IN 教師は、アクセントパターンを知るなど、高低アクセントに対する基本的な知識を有することが、指導に際して有用だと認識していることがわかった。高低アクセントの事前知識がほとんどなかった IN 教師も多かったが、ワークショップへの参加を通して、IN 教師それぞれが教える時に使える具体的な情報を得ていた。

6.2 研究課題 2

研究課題 2 では、IN 教師は、ワークショップを通してどのような高低アクセント指導のイメージを得ていたかについてまとめた。アンケート項目は、問 5~7 である。まず、問 5「生徒が高低アクセントを聞き取るコツ」では、以下のように、h から m までの 6 つの意見が聞かれた (表 4)。

表 4. 生徒が高低アクセントを聞き取るコツ

	記述内容	人数
h	たくさん聞く練習をする	7 人
i	聞く練習とリピート練習をする	3 人
j	音の下がることに注意する	2 人
k	シャドーイングする	1 人
l	入門段階から高低アクセントを教えること	1 人
m	理解するのが難しかった	1 人

(複数回答あり)

h.自由記述例

- 生徒たちにとって、聞くことが最も大切 (IN4)。
- 授業を始める前に、教師が CD を聞かせて聞く練

習をすること (IN10)。

i.自由記述例

- ・日本語の単語を聞いて、正しい高低アクセントでリピートすること (IN1)。

「h. たくさん聞く練習をする」(7人)、「i. 聞く練習とリピートを練習する」(3人)のように、多くの IN 教師たちは、たくさん聞く練習をしたり、リピート練習をすることが必要だと考えていることがわかる。先行研究では、「音声直す場合、正しい発音を聞かせるだけ、繰り返させるだけでは、ほとんど効果がない」(国際交流基金, 2009:140) ことが指摘されているが、今回のワークショップでは、モデル発音の聞き取りに際し、「音の下がる所に注意する」のがコツだと気づいた IN 教師もいた。今後、IN 教師たちはモデル発音の聞き取りに際し、音の下がり目に注意して聞く可能性があり、生徒たちにも聞き取るためのコツとして意識させることができよう。

次に、問 6「生徒に適した高低アクセント認識方法」について、IN 教師がどう考えていたか述べる。表 5 のように、ワークショップで提示したアからエまでの方法を複数回答で選んでもらった。

表 5. 生徒に適した高低アクセント認識方法

		方法	人数
音階	ア	インド式音階 (サレガマ) を使う	9人
視覚	イ	4つのアクセントパターンを図にして示す	10人
	ウ	4つのアクセントパターンを手の上下で示す	11人
話し合い	エ	4つのアクセントパターンについて、ペアやグループで話し合う	7人
	オ	その他	2人

(複数回答あり)

その結果、ア「インド式音階 (サレガマ) を使う」(9人)、イ「4つのアクセントパターンを図にして示す」(10人)、ウ「4つのアクセントパターンを手で示す」(11人)、エ「4つのアクセントパターンについて、ペアやグループで話し合う」(7人)と、エの方法が若干少ないものの、IN 教師がインド人生徒たちに適していると考えられる高低アクセント認識方法には、あまり偏りが見られなかった。

複数回答を認めていたため、個々の IN 教師がどのような組み合わせで答えたか、回答パターンも分

析する (表 6)。まず、①から④の回答パターンに共通して見られるように、全ての IN 教師が視覚を含んだ認識方法を支持しており、視覚的な認識が有効であると捉えている。指導法を考える上でも、視覚的な刺激がカギとなる可能性がある。

この他に、①音階・視覚・話し合い、②音階・視覚等の組み合わせ等を挙げた教師も多かった。ただし、組み合わせで提示するのが良いと考えているのか、単体でそれぞれ良いと考えているのかは不明であり、この点に関しては、フォローアップインタビューなどによるさらなる調査が必要である。いずれにしても、IN 教師が高低アクセント認識方法を複数紹介できる、あるいはいくつかの認識方法を組み合わせで紹介できることは、個々の生徒の高低アクセント理解に役立つと考えられる。

表 6. 高低アクセント認識方法の回答パターン

音、視覚、話し合いの組み合わせ	人数
① 音階 (ア) + 視覚 (イウ) + 話し合い (エ)	6人
② 音階 (ア) + 視覚 (イウ)	3人
③ 視覚 (イウ)	3人
④ 視覚 (イウ) + 話し合い (エ)	1人

(合計 13人)

最後に、問 7「生徒に適した高低アクセント指導方法」についてまとめた。

表 7. 生徒に適した高低アクセント指導方法

		方法	人数
n		聞く練習が重要	6人
o		高低アクセントに対する教師自身の理解	3人
p		入門時の高低アクセント紹介	2人
q		リピートが重要	2人
r		アクセントパターンを見ながら CD を聞く	2人
s		CD を聞いて、アクセントパターンを書く	1人
t		シャドーイングする	1人
u		インド式音階を利用する	1人
v		グループ活動をさせる	1人

(複数回答あり)

n/s/v.自由記述例

- ・主教材 (UME, MOMO, SAKURA テキスト) の巻末語彙リストにアクセントパターンをつける。それを見ながら付属の CD を聞くとよい (IN10)。
- ・生徒たちの学習内容に関係した CD を聞かせたり、グループ活動させたり、聞き取りの際アクセントパターンを書き入れさせたりする (IN12)。
- ・生徒たちにアクセントパターンが書かれている配

布資料を配り、それを見せながらできる限りたくさん聞く練習をさせる。そうすれば、生徒たちが楽に学べる (IN13)。

o/u.自由記述例

- ・インド式音階の利用が有用。そのために、まず教師である自分たちがよく (高低アクセントについて) 理解していることが必要 (IN5)。

p.自由記述例

- ・学習の初期にこのようなこと (高低アクセント) を紹介すること (IN7)。

表7のように、「n. 聞く練習が重要」(6人)と答えている。何人かのIN教師は、単に聞かせるのではなく、アクセントパターンを書きながら聞かせる、アクセントパターンを見ながら聞く、というように、視覚と組み合わせて聞く方法を挙げていた。

指導方法ではないものの、「o. 高低アクセントに対する教師自身の理解」(3人)、「p. 入門時の高低アクセント紹介」(2人)などを挙げるIN教師も少なくなかった。補助データとして用いた録画・録音からも、「ピッチアクセントについて今まで何も知らなかった。まず教師が勉強することが大事。教師がよくわかって初めて教えることができる」といったことや、「英語やヒンディー語も、生徒たちはどのようなアクセント体系であるかを知らない。異字同訓である「あめ」「さけ」などを聞かせ、日本語はどんなアクセントの言語か理解させるのが良い」など、まず教師自身が高低アクセントを理解することの重要性を認識している様子も見られた。

7. まとめと今後の課題

本研究では、インドでの高低アクセント指導の導入に向けて、初中等教育機関のIN教師を対象とした「日本語高低アクセント指導のワークショップ」を開いた。IN教師13人を対象とした記述式アンケートを用いて、1) IN教師は、ワークショップで具体的にどのような情報を有用だと受け止めたか、2) IN教師は、ワークショップを通してどのような高低アクセント指導のイメージを得ていたか、について調べた結果、以下の5点が明らかになった。a) ワorkshopで、IN教師は教えるための良いヒントが得られたと感じていた。b) IN教師それぞれが、インド式音階の利用等、教える時に使える具体的な情報を得ていた。c) 「生徒が高低アクセントを

聞き取るコツ」として、たくさん聞く練習をしたり、リピート練習をすることが必要だと考えていた。d) 「生徒に適した高低アクセント認識方法」として、全てのIN教師が視覚を含んだ認識方法を支持していた。e) 「生徒に適した高低アクセント指導方法」は、視覚と組み合わせて聞く方法を挙げるIN教師もいた。また、指導の前提として、高低アクセントに対する教師自身の理解が重要であることを認識していた。

以上のように、日本語の高低アクセントについて体系的な知識を持っていなかったIN教師たちは、学習者として様々な活動を体験することによって、アクセントにはパターンがあること、音の下がる場所に注意することなど、高低アクセントの基礎的知識を得ていた。また、サレガマを使って教えることなど、教師たちが教育現場で利用できる情報を得たり、具体的な指導法がイメージできるようになっていた。今回、13人分の記述式アンケートを用いて調査したが、得られる情報の範囲は自ずと限られる。今後、フォローアップインタビューなどによって、インドでの高低アクセント指導の導入にあたってIN教師が困難に感じるものの原因、問題点は何か、どのような解決策があるかなどを明らかにしていきたい。

注

1. インドの初中等教育機関では、三言語政策、つまり現地語、公用語であるヒンディー語、準公用語である英語を学校教育で教えるという政策を採っている(榎木 薫, 2002)。デリー周辺など、ヒンディー語が現地語(第一言語)になっている地域では、ヒンディー語を語学科目として習う必要がないことから、英語以外の外国語を採用している機関も多い。国際交流基金(2014)によると、1990年代後半から一部の初中等教育機関で日本語が導入されていた。2006年に高校卒業試験実施機関のひとつであるCBSE (Central Board of Secondary Education)の選択科目のひとつに日本語が正式に導入されたことから、デリーを中心に日本語教育を行う私立学校が増えている。
2. 国際交流基金(2014)によれば、2014年4月時点では、4名のJICA隊員が、いずれもデリーの初中等教育機関に派遣されている。
3. 本研究では、インドで一般によく知られている「サレガマ」または「インド式音階」の呼称を用いる。インド伝統の旋律はRagaという。西洋音楽と北インドの音楽とは異なる概念を持ち、前者がハーモニーに根ざしているのに対し、後者はメロディとリズムの複雑さに

重点があると言われている (Castellano, Krumhansl & Bharucha, 1984)。

4. この参加者のみ、高等教育機関の講師であった。
5. いずれも、2013年3月時点。
6. この3名は、日本での短期、あるいは長期の教師研修参加者であった。
7. 『UME』は、国際交流基金ニューデリー日本文化センターが CBSE の承認を得て作成した6年生用日本語教材である。
8. ワークショップに参加した IN 教師は14人であったが、1人は都合によりワークショップ終了直後に退席した。

謝辞

査読者の先生方には貴重なコメントを多々いただきました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

磯村一弘 (2001) 「海外における日本語アクセント教育の現状」『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 211-212.

榎木 蘭鉄也 (2002) 「インドの言語政策と英語教育」『秋田県立大学総合科学研究科報』(3), 13-31.

国際交流基金 (2009) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第2巻「音声を教える」』ひつじ書房

国際交流基金 (2014) 「日本語教育 国・地域別情報 2014年度インド」

<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/india.html> (2015年6月30日アクセス)

戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク

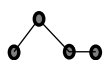
野原ゆかり (2008) 「発話の「分かりやすさ」を判断する要因——一般日本人と母語話者日本語教師の比較を通して——」『人間文化創成科学論叢』(11), 165-174.

Castellano, M.A., Krumhansl, C.L. & Bharucha, J.J. (1984). Tonal Hierarchies in the Music of North India, *Journal of Experimental Psychology: General*, 113 (3), 394-412.

とくま のぞみ / 元国際交流基金ニューデリー日本文化センター
n.tokuma@gmail.com
たかやなぎ さとみ / 元青年海外協力隊デリー大学派遣
stakayan@gmail.com

稿末資料 1 アンケート用紙

“Let’s talk about Japanese pitch accent!” Questionnaire

1. Was the workshop helpful for your teaching? Yes No
2. Do you find it easier to understand Japanese high-low pitch accent after the workshop? Yes No
3. Did you get good ideas for teaching Japanese high-low pitch accent to Indian students? Yes No
4. Please describe the information you found most useful today.
5. What will be the **key** to understand the high-low pitch accent for the Indian students?
6. **For recognition** of Japanese high-low pitch accent, which approaches will be useful for Indian students? (multiple answer)
 - (a) Using Indian musical scale instead of “Sol-fa(western scale)”
(why: _____)
 - (b) Showing four Japanese accent patterns using )
(why: _____)
 - (c) Showing four Japanese accent patterns using hands.
(why: _____)
 - (d) Talking about accent patterns through discussions with each other in pair or in groups.
(why: _____)
 - (e) Other
(why: _____)
7. What will be a good approach to learn Japanese pitch accent for Indian students?

A Report of Workshop on “Teaching Strategies for Japanese Pitch Accent”

— For Indian Japanese Teachers of Delhi Public School —

TOKUMA Nozomi and TAKAYANAGI Satomi

Abstract

This paper reports the findings of a workshop conducted on “Teaching strategies for Japanese pitch accent” in India. The workshop aimed at identifying the possibility of introducing Japanese pitch accent (JPA) by Indian teachers of Japanese (INJTs). Thirteen INJTs completed a survey; 1) What information did INJTs find most informative in the workshop, 2) How did INJTs visualize teaching JPA in their own classes. The survey results indicated that, a) INJTs found the workshop informative; b) INJTs got concrete information including the use of Indian musical scales for teaching JPA; c) INJTs considered listening and repeating multiple times are the keys to understand JPA; d) INJTs preferred to use visual aids for introducing JPA to the students; e) some INJTs considered that listening with visual aids will be a good method to teach JPA. This workshop helped INJTs to get basic information of JPA and INJTs can visualize how to teach JPA in their classes.

【Keywords】 India, Japanese pitch accent, secondary school, Indian Japanese teachers, Indian musical scales

(Former visiting lecturer of Japan Foundation New Delhi)

(Former Japan Overseas Cooperation Volunteer for JICA)